

【ポスター発表】

児童虐待と校内暴力の被害経験が青年の社会的孤立に及ぼす影響から 社会性技術の媒介効果

ユヒョンギョン
柳賢景 (全北大学校)

ハンサンヒ
韓尚憲 (全北大学校)

シンイエリム
○ 全北大学校・社会福祉学科 申譽琳
キムスンギユ
金純圭 (全北大学校)*

[キーワード] 社会的孤立、社会性技術、児童期否定的経験

1. 研究目的

最近、新型コロナウイルス感染症により、世界的に社会的孤立が深刻な社会問題となっている。社会的孤立は、他人との断絶を意味する客観的孤立と疎外感を感じる主観的孤立から構成されている。どの年齢でも社会的孤立は深刻な問題となっているが、特に『親密対孤立』を乗り越えるべき発達課題としている青年期では孤立による悪影響がより大きい。また、社会的孤立は青年期に起こった単純な出来事だと軽くは言えず、一生を通じてネガティブな経験が積み積もって、児童期に経験したネガティブな記憶をもつ青年が社会的孤立になったら、深刻な孤立段階に進入するリスクがより高くなるという。様々なネガティブな出来事のうち、特に児童虐待や校内暴力といった被害経験は、青年期の社会的孤立を誘発する可能性が高いとの報告もある。一方、孤立の代表的な保護要因としてソーシャルスキルが挙げられる。ソーシャルスキルの習得は孤立状態を改善できるが、ソーシャルスキルの欠陥と不足は社会的孤立を高め、児童虐待や校内暴力といった経験から悪影響をもたらせる可能性がある。故に本研究では、青年孤立を予測する要因として児童・青年期のネガティブな出来事に焦点を当てて児童虐待と校内暴力を考慮したい。更に、その関係から青年期に特に重要なソーシャルスキルの媒介効果を中心に調べるとする。その上、これらの結果を基に青年の社会的孤立を予防する実践的・政策的対案を提示する。

2. 研究の視点および方法

専門アンケート調査会社である「韓国リサーチ」のパネルを用いて青年層を対象に社会的孤立へのウェブアンケートを行ったデータを使用した。アンケートに回答した521名の若者のうち、「青年基本法」に基づいて19~34歳以上を対象に総380名の資料を分析に使用した。分析に用いた全ての変数の信頼度は、.777 ~ .896の範囲にあった。本研究での資料分析は、SPSS 25.0とPROCESS macro for SPSS V.4.0を活用して行い、頻度分析及び技術統計分析、信頼度検証、Pearson 相関分析、PROCESS macro Model 4による媒介効果検証、ブートストラップを行った。

3. 倫理的配慮

本調査資料は、全北大学校生命倫理審議委員会 (Institutional Review: IRB) の承認を受けた [JBNU 2022-04-003-006]。

4. 研究結果

主要変数の技術統計の分析結果、正規分布の仮定を満たしており、相関分析及びVIF指数でも主要変数間の多重共線性に問題点はなかった。児童虐待・校内暴力が青年の社会的孤立

* 交信著者 : soongyu@jbnu.ac.kr

に及ぼす影響を検証した結果、児童虐待(B=.220、p<.001)と校内暴力の被害経験(B=.187、p<.01)は、青年期の社会的孤立に正(+の影響を与えた。統制変数では年齢が高ければ高いほど経済活動をしなない場合の社会的孤立レベルが高かった。児童虐待・校内暴力と青年の社会的孤立との関係からソーシャルスキルの媒介効果を検証した結果、1段階(従属変数:ソーシャルスキル)では児童虐待(B=-.107、p<.05)と校内暴力(B=.100、p<.05)の被害経験がソーシャルスキルに負(-の影響を与えた。統制変数では男性に比べて女性で年齢が低いほどソーシャルスキルが高かった。2段階(従属変数:社会的孤立)では児童虐待(B=.170、p<.01)と校内暴力(B=.140、p<.05)の被害経験が社会的孤立に正(+の影響を与え、ソーシャルスキルは負(-の影響を与えた。上記で独立変数が従属変数に与える影響は、媒介変数を追加した後も依然として統計的に有意で、独立変数が従属変数に与える影響力の大きさは媒介変数の追加後に減少を見せており、部分媒介効果があることが分かる。また、媒介効果のブートストラップ検証の結果、媒介効果は統計的に有意であり、児童虐待で.051(BootLLCI=.0062、BootULCI=.1053)、校内暴力では.047(BootLLCI=.0004、BootULCI=.1082)であった。

〈表1〉 ソーシャルスキルの媒介効果

N=380

区分	1段階 従属: ソーシャルスキル		2段階 従属: 社会的孤立			
	B(SE)	t	B(SE)	t		
定数項	33.731(.826)	40.842***	31.556(2.152)	14.660***		
独立	児童虐待 被害経験	-.107(.052)	-2.075*	.170(.058)	2.944**	
	校内暴力 被害経験	-.100(.049)	-2.053*	.140(.055)	2.557*	
媒介	ソーシャルスキル		-.474(.058)	-8.222***		
統制	性別	-.841(.426)	-1.976*	.581(.477)	1.218	
	年齢	-1.049(.292)	-3.589***	1.068(.332)	3.220**	
	経済活動の有無	.267(.476)	.561	-1.433(.531)	-2.698**	
Model fit	F =6.678***、R ² =.082		F =23.791***、R ² =.277			
媒介効果		Effect	BootSE	BootLLCI	BootULCI	
児童虐待	-> ソーシャルスキル	-> 社会的孤立	.0507	.0253	.0062	.1053
校内暴力	-> ソーシャルスキル	-> 社会的孤立	.0473	.0279	.0004	.1082

B=Coefficient、SE=Standard Error. *p<.05 **p<.01 ***p<.001

5. 考察

本研究では児童虐待と校内暴力被害経験がソーシャルスキルに負(-の影響を及ぼし、ソーシャルスキルが社会的孤立に負(-の影響を与えた。これらの結果を基に、青年期の社会的孤立に接近し予防するためには、生涯周期別に接近して児童・青年期から児童虐待と校内暴力への予防及び支援策が必要になる。そして、児童・青年期にトラウマを持つ対象が、より酷い孤立に繋がれないように、社会福祉的な介入を行うときに過去力を十分に考慮しなければならない。また、孤立への予防や支援につながる制度作りなど、国単位での適切な対応とともに、社会的な関係が続けられるようにソーシャルスキルを高める多様なプログラム開発が必要である。